

日本語の補助動詞の使用から見る話し手の視点の捉え方

——日韓中の初対面会話に見られる補助動詞の使用に注目して——

許 明 子

1. はじめに

日本語のテ形・連用形による接続は、2つもしくは複数の事態をつなぎ、一つの長い文を作る働きと、補助的動詞・補助的形容詞と結びついて、複合的な述語を作る働きがある。本稿では「テ形+補助動詞」の形で複合述語として使われる構文を「補助動詞」と呼び、各複合述語の用法と日常生活における使用について分析を行う。

テ形に接続した補助動詞は日常生活において使用頻度が高く、アスペクト、意志・意図、授受などがあり、用法も様々である。水谷（2013: 36）では日本語の補助動詞の使用（特に「てくる」）は英語の一種の親愛表現と類似していると述べ、日本語の特徴の一つであると指摘している。さらに、同氏（2013: 37）では、日本語のレベルが上級に達した学習者を対象に補助動詞の使用について調べた結果、日本人の約60%の頻度だったと述べ、補助動詞の使用状況において外国人日本語学習者と母語話者の間に差があると指摘している。外国人日本語学習者にとって補助動詞の用法や使用に関する理解は容易なことではないと予想される。

そこで、本研究では中上級レベルに達した韓国人・中国人日本語学習者と日本語母語話者との初対面の会話において補助動詞がどのように使用されていたかに焦点を当てて分析を行う。

2. 補助動詞の用法と使用状況に関する先行研究

日本語記述文法研究会（2008: 280-281）によれば、補助動詞の用法には、①アスペクト的な述語形式となる場合「ている、てくる、ていく、てしまう、てある」、②意志・意図を表す述語形式となる場合「てみる、てみせる、ておく」、③授受動詞と結びついた場合「てやる、てくれる、てもらう」、④その他「てほしい、てほしがる」等が挙げられている。

補助動詞として使われている動詞はそれぞれ本動詞としての意味を表しつつ、補助動詞として使われた場合は上記の用法を持つようになる。補助動詞の表現形式は種類が多く、また用法も幅広いため、日本における日常生活では使用頻度が高いことが予想される。水谷（2013: 37）では、自然の会話に近い言語資料の中で補助動詞が用いられた用例数を数えて分析を行った。水谷が分析対象とした資料の語数は約180,000語であり、補助動詞の使用回数は1,085で、

使用頻度は約0.60%であったという。使用された補助動詞の中でも「てくる」の使用回数は221で、補助動詞全体の2割近いという結果だったと述べられている。水谷の調査結果を次の表1に転記する。

表1 補助動詞の使用頻度：母語話者

	あげる	ある	いく	いただく	おく	くださる	くる	くれる	しまう	みる	もらう	やる	計
上	1	7	52	108	9	36	106	23	87	39	9	0	477
徹	3	5	16	9	5	23	32	14	47	10	5	2	171
寅	10	3	37	15	15	35	83	60	110	23	14	32	437
計	14	15	105	132	29	94	221	97	244	72	28	34	1085

「上」は上村コーパス32組、「徹」はテレビ番組「徹子の部屋」4組、「寅」は映画「男はつらいよ」3編である。(水谷2013: 37の表を転記したものである)

水谷は「てくる」の使用回数や用法に注目し、補助動詞の付加は「感じのよさ」を表し、そういう点で「一種の親愛表現」であると述べている。つまり、話し手は聞き手と会話の「場」を共有していることを伝えるために「てくる」を使用しており、聞き手はその「場」の共有から会話に能動的に参加できるようになることから、親愛表現の一種であると言える。

前述したように「てくる」はアスペクト的な述語形式となり、状態の出現の意味を表す。話し手の経験を「てくる」で表現することによって、会話の「場」に話し手の経験が出現し、聞き手にとっても「場」を共有できるようになるということだろう。「来る」が本動詞として使われる場合、発話者が着点にいて移動物が自分に近づくことを表し、「求心的な方向性」の意味を持つ(天野2008: 89)。話し手に視点が置かれ、ものの移動や状態の出現等を表すことから、文法的な意味としてはアスペクト的な意味を表し、語用論的な用法として話し手と聞き手の「場」の共有という意味を表すと考える。

水谷(2013)では「てくる」の使用回数について「一種の親愛表現」として考察されていたが、「てくる」以外にも上記の表1の結果からは「てしまう」の使用回数が最も多く、注目すべきである。「てしまう」は動きの完遂を表すアスペクト的な意味を表すと同時に、話し手にとって望ましくない事態の発生、もしくは話し手の予想から外れた動きであると捉えているときに用いられる(日本語記述文法研究会2007: 46)。「てしまう」が表1の「男はつらいよ」の映画において使用回数が多いのは、他の2つの言語データに比べて、日常場面における事態や動きに対する話し手の捉え方を表すことが多いと予想され、日常場面においても「てしまう」が多用されているのではないかと考えられる。

さらに、上記の表1を見ると、「いただく」の使用回数も多いことが分かる。「いただく」(てもらう)は「てくる」と同様に、話し手に視点が置かれ、ものや行為が話し手に向

かって移動していることを表す。話し手に視点が置かれるとともに、話し手が事態をどのように捉えているかを表す用法があることから、日常の会話において多用されていると思われる。前述したように、水谷によると上級レベルに達した外国人日本語学習者であっても補助動詞の使用が日本語母語話者の約6割程度であるという指摘されていることから、日本語学習者に対する補助動詞の指導が必要であると考えられる。

本研究では韓国人・中国人日本語学習者（以下、それぞれ韓国人学習者、中国人学習者）と日本語母語話者が日本語を用いて意見交換を行った会話データの分析を通して、日韓中の補助動詞の使用に関する状況と考察を行う。

3. 調査概要及び結果

本研究の調査概要は以下の通りである。

- ・調査対象：日韓、日中、韓中の初対面ペア18組、会話は約20分程度
- ・日本語学習者の日本語レベルは中上級以上のレベル
- ・実施期間：2013年12月～2016年3月
- ・調査方法：日本事情に関する7つのテーマが書かれた一覧リストまたはくじを利用して、両者が一つのテーマを選び、20分から30分程度それぞれについて自由に意見交換を行う。会話はビデオカメラで録画し、文字起こしを行ったテキストデータを分析する。
- ・会話データ：T大学の日本語コースを受講するために実施している日本語プレースメントテストの結果、全員、中上級もしくは上級レベルにプレースされた学習者である。学習者の日本語力は日常生活においてコミュニケーションには支障を感じず、またアカデミックな場面でも支障がないと判断できる学生を対象としている。

調査協力者には調査の目的、調査方法、個人情報の保護等について事前に説明を行い、ビデオ録画についても同意を得ている。また、研究活動を目的として、録画された言語データを公開することについても承諾を得ている。

会話データのペアと会話時間数は以下の表2の通りである。Jは日本語母語話者、Cは中国人学習者、Kは韓国人学習者を示す。

表2 会話データのペアと会話時間

ペア	J1/C1	J2/K1	C2/J3	K2/C3	C4/K3	J4/C5	K4/J5	J6/C6	K5/J7
時間	24m1s	35m45s	23m58s	23m16s	40m45s	22m10s	21m46s	20m22s	23m38s
ペア	C7/K6	C8/J8	K8/C9	J9/K8	K9/C10	K10/J10	J11/C11	J12/K11	K12/C12
時間	23m26s	24m2s	20m46s	22m32s	25m46s	28m56s	23m44s	22m45s	26m12s

データを収集した18組の会話時間を合計すると483m17sのデータ量であり、一定の傾向が見られるデータであると言える。

4. 補助動詞の使用結果と特徴

補助動詞の使用回数をまとめると次の表3の通りである。太字の部分は特に使用回数が多かった項目である。

表3 補助動詞の使用回数

	てあげる	てある	ていく	ていただく	ておく	てくださる	てくる	てくれる	てしまう	てみる	てもらう	てやる	合計
J		3	1		1		2	5	29	11	15		43
K	1	2		1	1		1	6	21	8	2	1	28
C	1	1	1		2		1	2	2	1			9

補助動詞の使用頻度は、日本語母語話者が43回で最も多く、韓国人学習者が28回、中国人学習者が9回で最も少なかった。日本人と韓国人学習者に比べて中国人学習者は全体的に補助動詞の使用回数が少なく、特定の補助動詞の使用回数について注視すべき傾向は見られなかった。補助動詞の表現形式別の使用状況は日本語母語話者は「てしまう」「てもらう」の使用頻度が高く、韓国人学習者は「てしまう」の使用頻度が高かった。

4.1 授受表現「てもらう」の使用

モノやコトの授受、恩恵の意味を表す授受動詞の意味が補助動詞にも受け継がれ、行為の授受を表す授受補助動詞にも恩恵の意味が含まれている。恩恵の意味は主観的なものであり、話し手にとって好ましい出来事であると捉えていることを表す。表1の使用回数の結果からもわかるように、恩恵の意味や話し手の視点を捉えた「てくれる」「てもらう」の使用回数が多い結果となっている。

本調査では特に日本語母語話者において「てもらう」の使用回数が多く、話し手の視点を含めた表現として使われていることが分かる。

次の《会話例1》は日本語母語話者の「てもらう」の使用例である。会話例の中のPはK1、KはJ2の発話を示す。

日本語母語話者である話し手のKは570、574、576の発話例のように、友人がKの引越しを手伝った出来事に対して「てもらう」を用いて恩恵の意味を表している。話し手が恩恵の受け手となり、動作を行った友人に対する感謝の意味を表す表現であり、主観的な表現として

話し手の視点を捉えている。

また、《会話例 2》で用いられている「てもらう」は恩恵の意味というより、聞き手に対する理解を求める意味を表している。会話例の中の H は J1、C は C1 の発話を示す。

《会話例 1》

	567	P	なんか引っ越し費用とか家賃
	568	K	あーかかりますね。
	569	P	どのぐらいですか。
→	570	K	えー引っ越し費用は、私友達に、手伝ってやってもらったんで、ただ。
	571	P	えー。
	572	K	で友達のお昼ご飯おごったのでその分だけ。
	573	P	わー。
→	574	K	なんか一、(あの人) サークルの友達とか、車持ってる先輩とかに、あの貸してもらって、運んでもらって、
	575	P	は一。
→	576	K	一緒にやってもらって、で先輩たちのお昼ご飯おごってもらっ… (笑い) おごおごおごってもらったんじゃない、おごった。
	577	P	おごっ (笑い)
	578	K	そう。までもその分だけですな。
	579	P	あー。
	580	K	だーそうだ、友達 (やす) 友達に頼んだりすると安くつきますよ。

《会話例 2》

	144	H	本国で
	145	C	うん、他の国で同じ科目をしな、勉強しなければならない
	146	H	え
	147	C	ことじゃないですか。
	148	H	えっとこれ自体ですか。
	149	C	うん。
→	150	H	必修、要は、授業の中に、留学っていう授業があるって考えてもらえるといいと思うんですけど。
	151	C	ああ、なるほど！そうです ()
	152	H	授業、で絶対に取らなければならない授業の一つに留学っていう
	153	C	ああ
	154	H	そういう
	155	C	例えば、どういう、必修科目ですか。
	156	H	えっと要は、
	157	C	うん

日本語母語話者であるHが150の発話で「考えてもらえるといい」のように「てもらう」を用いているが、恩恵の意味ではなく、会話相手のCに対して「必修科目」の説明を行い、理解を求めている表現である。授受表現の中でも特に「てもらう」は相手に対して依頼したり理解を求めたりする場合に用いられることが多く、話し手と聞き手が関係する日常生活の場面では授受表現が多用される。

しかし、韓国人・中国人日本語学習者は日本語母語話者ほど授受補助動詞を多用しておらず、視点の捉え方、話し手の主観的な立場を表す場合に、日本語母語話者と相違点があると考えられる。

益岡（2013: 33）では、「てもらう」構文の「Causative type（使役型）」と「Passive Type（受身型）」が機能語化することで恩恵構文を形成していると述べている。上記の《会話例1》はPassive Typeの「てもらう」構文、《会話例2》はCausative typeの「てもらう」構文であるが、受益者の与益者に対する働きかけ方によって使い分けられている。恩恵構文としての「てもらう」構文の機能語化がすることによって、日常生活においても多用されるようになった可能性がある。この点については今後さらに研究が必要である。

4.2 主観的な感情を表す「てしまう」の使用

本調査の分析の結果、日本語母語話者と韓国人学習者において最も使用回数が多かった補助動詞は「てしまう」である。本研究では「てしまう」の形式だけではなく「～ちゃう」「～じゃう」等の表現も「しまう」のバリエーションとして分析対象に含める。

次の《会話例3》の「てしまう」は韓国人学習者の発話に用いられた例である。会話例のAはJ5、PはK4の発話を示す。

《会話例3》

	455	A	あー確かに（笑い）。
	456	P	むだづかいですね。
	457	A	確かにね。せっかく通わたのに
	458	P	そうですね。
	459	A	意味ないじゃんって。
→	460	P	そう思っちゃう。でみんな、通わせてるんですけど、
	461	A	親、親とかが？
	462	P	うん。(k) まあ、親とか通わせたり、
	463	A	うんうんうん。
	464	P	本気でだ、どこか目指して
	465	A	あー
	466	P	やったりするんですけど、

467	A	うんうんうん。
468	P	それでもなんかやる気がないとか、
469	A	うん。
470	P	勉強する、やっぱり塾とか通わせると、勉強する姿勢がちよっと悪くなるんです。

韓国人学習者の発話460で「思っちゃう」という「てしまう」の使用例が見られる。日本人学生Aの457で「せっかく通わたのに」発話に対して、韓国人学習者Pが460の発話で「そう思っちゃう」と表現することによって、相手の発話に対して同意を表すと共に、「残念に思う」という主観的な感情の表現も表している。主観的な感情は話し手自身の視点の捉えた表現として用いられる。

前節で述べた授受補助動詞は恩恵の意味を表し、「てしまう」は残念な気持ちを表す点で話し手の視点や当該の出来事に対する捉え方が表現されている。日本語母語話者と韓国人学習者の発話には授受表現や主観性を表す補助動詞の使用回数が多く、共通点が見られる。しかし、中国学習者には同様な傾向が見られず、補助動詞の使用回数が少ない。次節で中国人学習者の視点の捉え方に関する相違点について述べる。

4.3 中国人学習者の視点の捉え方

南（2015）では日本語母語話者の語りでは視点が主人公に固定される傾向が認められると述べられている。その結果、日本語母語話者の語りには中国語話者や英語話者より受動文の使用頻度が高く、I-JASの会話データの分析結果から有意差が認められているという。また、木村（2014）によれば中国語母語話者は事態認知において傍観者的な視点を取り、ステージを見る観客のごとく「ひと事」として事態を捉えているという。日本語母語話者は現場立脚型の視点をとりがちであり当事者的な視点を取り「わが事」として捉える傾向が強いと述べている。

以上の先行研究における指摘は本研究で取り上げている補助動詞の使用傾向にも現れており、出来事に対する話し手の視点を表す補助動詞の使用頻度が中国人学習者において極端に少ないことが明らかになった。つまり、ある出来事を表す際に「わが事」として捉えて表現するのではなく、出来事の端から観察している傍観者的な観点で表現していると言える。そのために、視点を捉える補助動詞、主観性表現の使用頻度が低い可能性がある。南（2015）では受動文の使用頻度について分析を行った結果、日本語母語話者が中国人学習者より使用頻度が高く視点の捉え方で相違点があると指摘している。本研究では補助動詞の使用状況に注目して分析を行ったが、今後は受身文や移動動詞等についても分析を行う必要がある。

5. まとめ

本研究では話し手の視点の捉え方の違いが日本語の補助動詞の使用傾向に影響を及ぼしているのではないかという観点から、18組の日韓、日中、韓中の接触場面で行われた意見交換の会話の分析を行った。その結果、日韓の間には授受補助動詞や「てしまう」の表現において類似した傾向が見られる一方、中国語学習者は補助動詞の使用頻度が低いということが明らかになった。その理由として考えられるのは、中国人学習者は話し手自身に視点をおいた表現を用いず、出来事を端から描写するような捉え方をしているのではないかと思われる。南（2015）では受動文の使用率において同様な結果が現れたと述べられているが、補助動詞においても同様な傾向があることが分かった。

日韓の間には類似性が見られるが、「てもらう」は日本語母語話者において使用回数が多く、恩恵の意味だけではなく、軽い命令や依頼等の場面にも用いられており、拡張していることが分かった。以上の結果を踏まえて、今後は「てもらう」の視点の捉え方と意味拡張についてさらに分析する必要がある。それは今後の課題としたい。

参考文献

- 天野みどり（2008）『学びのエクササイズ』ひつじ書房
木村秀樹（2014）「こと・ところ・ことば—現実をことばにする視点—」唐沢かおり・林徹（編）『人文知
1 心と言葉の迷宮』pp. 97-118, 東京大学出版会
近藤安月子（2008）『日本語教師を目指す人のための日本語学入門』研究社
日本語記述文法研究会（2007）『現代日本語文法』③, くろしお出版
日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法』⑥, くろしお出版
益岡隆志（2013）『日本語構文意味論』くろしお出版
水谷信子（2013）『感じのよい英語 感じのよい日本語—日英比較コミュニケーションの文法—』くろしお出版
南雅彦（2015）「日本語学習者の「形」から見えてくる習熟度—語彙・時制・視点—」LSAJ 4回目シンポジウム予稿集

キーワード：視点、補助動詞、テモラウ、テクレル、使用率

Abstract

How to grasp the speaker's viewpoint the use of Japanese auxiliary verbs:
Through the use of auxiliary verbs found in first-time conversations
between Japanese, Korean and Chinese Japanese Learner

HEO Myeongja

In this study, we clarify that the difference in the way the speaker perceives the viewpoint influences the tendency to use Japanese auxiliary verbs. To that end, we analyzed 18 pairs of conversations between Japanese and Korean and Chinese Japanese learner. As a result, there was a tendency between Japanese and Korean Japanese learner that they were frequently used in the “te morau, te kureru” and the expressions of “-te shimau”. On the other hand, Chinese learners use auxiliary verbs less frequently, which is different from Japanese and Korean Japanese Learner. It seems that Chinese Japanese learners do not use expressions that focus on the speaker his/herself, but rather portray the event from the edge.

Keywords: perspective, Japanese auxiliary verbs, “te morau, -te kureru”, frequency of use